東京薬科大学新聞

発行所　東京薬科大学
新聞会
責任者　村上清貴

四月・五月上期号

気軽な利用を！
学生相談室

四月から新体制に

四月から学生相談室の相談範囲が大幅に広げられ、利用しやすくなった。これは学生の協力によってより良く発展する可能性を大いに含んでいる。今後学生相談室を活かすためには、学生が積極的に要望を出していくことが必要であろう。

四月から学生相談室が新しいシステムで動きはじめた。

これまで学生相談室には、女子寮長の高澤さんが週三回、精神科医の関先生が月一回みえて相談を受けていた。しかし相談室へ行っても誰もいないことの方が多く、相談室の存在自体を知らない学生も多かった。また、精神的な問題しか受け付けないというイメージが強く、出入りしにくい状態だった。そこで、新年度よりこれらの問題点を解決し、相談室を充実させるために、学生課の中に設置された。

新しい相談室が今までと大きく違う点は、担当者の菊池さんが常時学生課で待機していることである。これによって、月曜から土曜までいつでも応じられるようになった。また、精神的な問題に限らず勉学上の問題、学生生活一般の問題など、どんな問題でも幅広く受け付けてくれる。所もこれまでの保健室の隣から学生課の隣に移動した。内密の相談ができる部屋が二部屋あるほか、「たまり場」的に学生が気楽に訪問し、おしゃべりできるような場所も設けてある。

学生相談室を利用したい時は、学生課へ行き相談事がある旨を告げればよい。菊池さんを呼び出してもいいし、他の人を通して伝えてもらってもかまわない。学生課は、学内のどの先生にでも取り次いでくれる。本人が誰に相談すべきかわからないようなときには、内容によってしかるべき先生を紹介してくれるし、学内の先生方では解決できない問題が生じた場合は専門の先生を紹介してくれる。相談室へ直接行きにくければ電話（内線733）をかけてもよいし、バスの中等で菊池さんに声をかけても良いそうだ。

また、「キャンパスライフ」相談役の先生として酒井教授、土屋教授、浜口教授、神鷹助教授の四先生が載っているこの学生相談役というのは、

＊＊＊

選択制の実現を

語学問題特集その2

語学問題特集の第二回めとして、今回は英語について考えてみた。これを通じて一・二年生はもちろん三・四年生も、考えてほしい。

文学から科学エッセイまで
―教材比較―

まず始めに、英語の教材、授業のクラスごとの比較をしてみたい。今回は一例として、'86年度の二年生の英語Ⅱについて見てみよう（表参照）。Ⅰは年間で一冊である。かなり難しく、これがきちんと読めれば大学院入試も大丈夫なのだそうだ。Ⅱ・Ⅲはハードボイルド・医学ミステリー・探偵小説と、興味深い内容で、英文も比較的平易で、専門語も少ない。Ⅳは二世紀に書かれたものであり、話の舞台は二世紀である。修飾のしかたや比喩が文学的に凝っていて、かなり難解である。文章全体も単調。Ⅴも文学だが、二世紀に書かれたものであり、やさしい文章だ。

以上のような所を見てみると、かなり教材に差がある。Ⅳなどかなり古い時代の小説を読みこなせることが、今果たして必要なのだろうか。また、表には試験範囲のページ数が挙げてある。文章の難易とは難しいが、少ない所で年間二四ページ、多い所で一二〇ページと五倍近い開きがある。これは、授業のやり方にも関係してくる。大部分が数行～十数行ずつ学生にあてて訳させる「訳読」といわれる方法である。唯一違うのはⅢで、全訳を行わず、重要な所だけを集中的にやる。そのため、進むのが速くなるようだ。そのためⅢでは中間テストを行っている。Ⅴも、毎時間単語のテストを行っている。ここにあげたのはほんの一例であり、細かい所をみればかなりの差があり、それが難易の違いになり、通りやすい先生、通りにくい先生ができてくる。

Ⅰ 通年
① The Hazards of Science
② 科学エッセイ
③ 1970年代
④ 前期　32ページ
　後期　42ページ

Ⅱ 前期
① NO COMEBACKS
② 小説（ハードボイルド）
③ 1972年
④ 37ページ

後期
① A GAME OF WILD ;INDIANDS ELEVEN BLUE MEN;A PINCH OF DUST
② 医学ミステリー（ノンフィクション）
③ 1950年代以降
④ 46ページ

Ⅲ 前期
① Contemporary Detective Stories
② 短編探偵小説
③ 20世紀
④ 51ページ

後期
① Best Shortshort Stories
② 短編
③ 1950年代
④ 62ページ

Ⅳ 通年
① François Villon & A Lodging for the Night
② 評論，伝記小説
③ 19世紀
④ 前期25ページ
　後期20ページ

Ⅴ 通年
① ARABY AND OTHER STORIES
② 短編小説
③ 20世紀前半
④ 年間24ページ

① 書名
② ジャンル
③ 年代
④ テスト範囲のページ数

テキストをもっと活して

酒井教授

教師間の格差がある程度出るのはやむを得ない。成績についてある程度の配慮は必要であり、配慮していきたい。近いうちに英語の教員全員と教務担当者とで、話し合いを持つ予定なので、そこで検討していく。

教員の選択については、必修の語学では他大学でも選択制にしている所はないし、教室や人数のバラツキ等の問題があるので無理ではないが、ただし一年と二年で教員が重ならないようには配慮している。

テキストに関しては、一年では教養を深める意味を含めて、文学などもとりあげてゆき、二年では専門的なものをとりあげる方向にしている。英語をやる理由の一つに、視野を広げるというのがある。だから、文学を読むことも必要である。もちろん十九世紀以前の極端に古いものは問題であるが、英語は平均的英米人の書いた文章が読めることを目指しているし、また読めることが大学卒の資格であるともいえる。実際に卒論生は読めている。また、実際に翻訳を仕事にしている卒業生もいる。まず自分で辞書をひいて、英語の得意な学生と苦手な学生が七十数人一緒に授業をするのだから、苦手な者にとってはかなり辛いものとなるだろう。そのため、訳文を丸暗記して試験に臨むといった事態も出てくる。この点から考えてみると、基礎的な所からやっていくクラスを作っていくことも必要なのではないか。

最終的に必要なのは、私達の大部分が薬学関係の仕事に就くことを考えると、薬学関係の最新情報などを英語を通じて手に入れられるようになることである。この点をまず、学生、教員（特に東薬専任で講師の先生方）双方が認識する必要がある。そしてその英語力をつけるためには、英語の得意な学生と苦手な学生がいろいろなアプローチの方法があるのだから、各先生方それぞれのやりかたにまかせる。それぞれの違いを本当に活かし、また学生間の語学力の違いに対応するためには、やはり、語学を選択制にするべきではないだろうか。教室等の問題はあるが、まず手始めに、一年の語学のコマはA, B, C, Dなど同じ時間に違う授業をやっているが、ここを二つのうちどちらか選択という形にできないだろうか。

学ぶ目的を明確に

今回は英語について以上のように見てきたが、いろいろな授業があることがわかる。ただここで問題となっているのは、それぞれの評価のしかたになり差があることである。もちろん勉強しない者が落ちるのは当然のことだが、同じ努力が同じように評価されないのは困る。特に東薬の場合は進級がからんでくるので影響は大きい。一般に言われている通りやすい教員、通りにくい教員というのはやはり存在している。一年のあるクラスの留年者を見てみると、難しいと言われている語学の科目をからめての留年が多い。易しいと言われている教員の多いクラスでは、長欠者を除き、留年していない。

別の点から考えてみると、英語は学生のほぼ全員が、最低六年やってきている。そのため、入学時にかなりの学力差ができている。東薬では入試の際、基準点がないしたがって、昨年度のデータを見てみると、英語の点が十点台で合格している者もいる。だとすれば、スタートラインから違うわけである。それが英語の得意な学生と苦手な学生が七十数人一緒に授業をするのだから、苦手な者にとってはかなり辛いものとなるだろう。そのため、訳文を丸暗記して試験に臨むといった事態も出てくる。この点から考えてみると、基礎的な所からやっていくクラスを作っていくことも必要なのではないか。

最終的に必要なのは、私達の大部分が薬学関係の仕事に就くことを考えると、薬学関係の最新情報などを英語を通じて手に入れられるようになることである。この点をまず、学生、教員（特に東薬専任で講師の先生方）双方が認識する必要がある。そしてその英語力をつけるためには、英語の得意な学生と苦手な学生がいろいろなアプローチの方法があるのだから、各先生方それぞれのやりかたにまかせる。それぞれの違いを本当に活かし、また学生間の語学力の違いに対応するためには、やはり、語学を選択制にするべきではないだろうか。教室等の問題はあるが、まず手始めに、一年の語学のコマはA, B, C, Dなど同じ時間に違う授業をやっているが、ここを二つのうちどちらか選択という形にできないだろうか。

◇◇◇